

## 竹内好と魯迅、毛沢東

Yoshimi TAKEUCHI et Lao She, Mao Ze Dong

佐々木 涇\*

SASAKI Thoru

### まえがき

長野県日中友好協会の井出正一会長が書いた「再認識される竹内好氏」という文章を、日中友好協会の機関紙である「日本と中国」3月6日号で見つけた。私が注目した部分は次のようなところである。

「よろこびと、悲しみと、怒りと、失望のまざりあった気持ち」で迎えた8・15は「私にとって、屈辱の事件」だったと回想する(全集第13巻77頁)(竹内好)氏の思想は、日本が軍国主義から民主主義へ変わった“解放の日”と考えた一般国民や多くの「進歩的文化人」と異なる独自性——それは私には難解極まるものであったが何故か魅力も感じられた——を持っていた。

傍点の部分の「私」は井出会長であることは言うまでもない。井出会長が「難解極まるものであったが何故か魅力も感じられた」という思いを抱いたのは、その前の文章である。すなわち日本の敗戦の記念日である8月15日に「よろこびと、悲しみと、怒りと、失望のまざりあった気持ち」の状態となった竹内好が「屈辱の事件」と見なしたことである。竹内好がこのような考えを抱いたことについては、おって見てゆきたい。

そしてもう一つの部分である。これも引用して

おきたい。

あれほど愛着とともに評価していた、抵抗を通して近代化せんとする中国の土を、戦後一度も踏もうとしなかった竹内氏の真意・心境はどこにあったのだろうか。

竹内好は、何故中国へ行かなかったのだろうか。と言う疑問は、私が彼の年譜を細かく見ていて疑問に思った点でもある。

また、年譜を作成している間に気がついたことは、政治の世界に何度も誘われていながら、すべてを断っている。何故だろうかと言う疑問がわいてきた。

### 1 生い立ちと大阪高校時代

竹内好は、1910(明43)年10月2日、長野県南佐久郡白田町(現佐久市)にて誕生した。ところがその一ヶ月前の9月に父母は入籍している。すなわち、父親の伊藤武一は、竹内家に入籍、起よしと養子縁組をしたのである。この父親である伊藤武一は、松本近在の出身で家業は医者であった。松本中学卒業後、長野税務監督局雇として白田税務署勤務となり白田町に居住していた。1885年(明治18)生まれで、竹内好の母親である起よしも同じく1885年生まれで、東京の渡邊女学校(現東京家政大学)を卒業している。また、この

\*企業情報学部教授

竹内宗家は代々白田にある上諏訪社の神職を営んでいたが、起よしの父、銀次郎は、白田町長をつとめた竹内繁家から分家して、手広く商売を営んだ。二男二女があり、起よしはその末子であった。二人の息子はともに分家し、姉むつは早世したため、伊藤武一を婿養子に迎えた。銀次郎はこの土地に、富屋の屋号で質屋、瀬戸物屋、酒屋、料理屋、旅館、唐物屋などを経営して羽振りがよかった。養子に入った武一はその資産を相続した。武一は、新潟の長岡、飯田そして東京へと転勤した後に退職した。そして義父の資産を利用して、新たな事業を始めたのが1915年（大正4）で竹内好が五歳の時である。そして1924年（大正13）11月、14歳の時、母親を失っている。

さて当の本人である竹内好は、1927年（大正2）、17歳で中学4年のとき、一高と三高の受験を失敗している。そして翌年4月に大阪高等学校の文科甲類（英語を専修、乙類は独語、丙類は仏語）に入学している。ちなみに一高は、東京大学教養学部の前身であり、第二高等学校は東北大学教養部、第三高等学校は京都大学教養部、第四高等学校は金沢大学、第五高等学校は熊本大学である。すなわち当時の一ランク上の高等学校には進めなかったということである。しかし三年後には、東京帝国大学文学部支那文学科に入学している。

この大阪高校に入学したときに知り合って親しくなった友人に保田与重郎（1910・明43～1981・昭56、文芸評論家で古典文学を専攻）、田中克己（1911・明44～1992・平4、詩人で東洋史学者）、杉浦正一郎（1911・明44～1957・昭32、九州大学教授）、室清らがいる。

この大阪高等学校に在学中の大きな事件は1930年（昭和5）の校友会雑誌をめぐる事件である。『竹内好全集第17巻』（筑摩書房、1982）に掲載されている年譜を次に抄録する。

1930（昭5）20歳

1月、校友会学芸部委員。学芸部は機関誌『校友会雑誌』を年二回発行（部長：佐々木恒清教授）。「学芸部として、論の喚起、正統な批評の機関である校友会誌」とする竹内の編集方針に対して慎重論が多く、実現せず。5月下旬、会誌編集に際し、

佐々木部長と対立。10月22日、短歌数首と小作争議を扱った小説が不許可となる。11月24日、『帝陵』編集委員の室清（文甲三年）、上武圭一、壇辻浩、中道一男（以上文甲二年）、山田浩（理丙一年）の五人が授業中に呼び出され、特高によって阿倍野署に留置された。警察は、『帝陵』五号掲載の三篇（「村のピオニール」「延線」「生くる」）を左傾作品とみなし、作者の本名を追及するのみだった。上武、壇辻、中道と読書会のメンバーの小崎俊、渡辺恵、藤沢彬は、生徒を特高に引き渡した学校当局の責任追及を全校に訴え、各新聞社にも取材を要請。11月25日、全校生徒を対象とした東京帝大教授河合栄治郎の思想善導講演会が終り、退席すると、校友会理事の俣野博夫（文乙三年）や小崎が、事情を訴え、ストに突入。竹内は『「神聖なる授業中に生徒五名を警察に引き渡した」学校当局』を糾弾する演説をする。糾弾された生徒主事は、事態を鎮めるために警察に駆けつけ、五人を釈放させた。11月27日、午前一時、投票のすえ、ストは解除。学校側は主謀者として竹内と保田与重郎を認めたが、この終熄により、犠牲者とはならなかった。（『竹内好全集』第17巻、1982。年譜抄録）

ここに出てきた「帝陵」とは寮の機関誌である。そしてやはり「全集」に収録されている『校友会誌』の後記を引用しておく。

予告の「現代思潮批判」は原稿が集らない為に中止した。一つには僕の最初の計画が散漫で無理があった為だからあやまる。だが何と不勉強者ばかりだろう。

十号の編輯は鎌田がやった。大きな論文ばかりだ。幸い理科の投稿があった。批判は別として理科の諸君にもっとフレッシュな動きを望みたい。

小説は一篇集って検閲でやられた。内容は農村の疲弊と小作争議を通じて少年たちが、ピオニールの結成にまで意識を高めてゆく経路を、荒いタッチでスケッチしたもの。僕らが良いと思うものが余す所なく奪われてゆく。斯くて吾々の雑誌も定跡を辿りはじめた。人々は真の学芸運動の為に学芸部を見棄てねばならなくなったのだろうか。それとも単なる吾々は無能だろうか。委員に方向を与えよ。吾々には只この事実から、吾々の世界観を形づくる冷かな

現実の断片を拾い得るに過ぎぬ。各研究会も沈滞期に入った。新人を待つ。第十号(1930・11)

(『竹内好全集第17巻』筑摩書房1982.9。72頁)

ピオニールは、ロシア語のピオネール(pionier)を用いたもので、ソ連の共産主義少年団のことをいう。この組織は、1922年創設され、全連邦的に組織され、学校とも連絡を保ち、青少年を実践的な活動を通じて訓練した。

11月24日に「帝陵」の編集員が特高に引張られた原因のひとつに、「村のピオニール」が関わっていると思われる。上に引用した編集後記に記された「検閲でやられた」作品は、続く文章で「村のピオニール」と推測できる。しかしこの作品は誰の作か不明である。竹内好が亡くなる直前に書いたと思われる「悔其少作」と題したエッセーがある。これは1977年5月号の雑誌「潮」に遺稿の一つとして掲載されたものである。その一部分を引用する。

ご多分にもれず当時の大阪高等学校にも文芸部とか学芸部だかがあって、年二回『校友会雑誌』を出した。部長が日本史の教授で、生徒委員は二名、各年度文甲一、文乙一である。たぶん部長教授が作文の兼任だったのかもしれない。一年のときの作文の成績を勘考して天降りに委員を任命したように思う。文甲から私が、文乙からKが選ばれた。……略……二年のときは先輩の見習い、三年で実務を担当する。Kはともかくとして、私は温厚な部長にずいぶん手を焼かせた。そのことを書くとき長くなるので省く。要するに自治を要求してあばれたわけだ。

私の記憶では、投稿がさっぱり集らぬので、自分が穴埋めに書いたのか、それとも投稿があまりに幼稚なので、没にして自分で書いたのか、どちらかである。後者かもしれない。なにしろプロレタリア文学まがいの作文が校誌にのったのは大阪高等学校では私の在任中だけだった。

「中国文学研究会」以前の作で活字になったものは、長篇(!)ではこの一篇だけである。原本は失われてキリヌキだけが手もとに残った。

(「悔其少作」『竹内好全集第17巻』筑摩書房1982.9。58頁)

手元に残ったとする作品は「男たち」という作品である。この引用文から察すると「村のピオニール」は竹内好の作品と見てもよいかもしいが、不明である。

竹内好の高校時代のエピソードはこのくらいにしておきたい。これらのエピソードからどんな若者像が浮かんでくるか。

竹内好が展開した「交友会誌」の編集方針は、「学芸部として、輿論の喚起、正統な批評の機関である校友会誌」という位置づけである。これに対して友人たちは慎重論を唱えた。このエピソードだけでも竹内自身が「自治を要求して暴れた」と書くのはまさしく、竹内好が突出していたことを示す証しとなる。このことは多くの若者、とりわけ学生たちの自己主張、そして当時の社会主義、共産主義に傾倒していた考え方を行動に表したその一つであると見なしてよい。ご存じの通り1930年代初めは、さらなる軍国主義、そして戦争に突入する直前と見なしてもいい時代である。翌年の1931年9月18日には「満州事変」柳条湖事件が起きている。社会での縛りがきつくなり、非合理的な言い分がまかり通る時代には、いつの世でもそうであるが、敏感な若者たちは反発するのが常である。まさしく竹内好はその一人であった。

## 2 中国への関心

1931(昭6)年4月、東京帝国大学文学部支那文学科に入学した。このときに武田泰淳と知り合い、以後友人となる。この武田泰淳(1912・明45~1976・昭51)は、第一次戦後派作家として活躍した小説家である。

竹内好は、芥川龍之介の『支那遊記』、『中央公論』<sup>ながおかつあき</sup>での長岡克暁の「蒋介石の支那」、『支那小説集』に収録されている魯迅の「阿Q正伝」などの中国関連のものを読んで触発されたようである。そのためか翌年には外務省の事業である「朝鮮満州見学旅行」に参加している。途中から一行と別れての中国滞在はさらに40日ほどになる。これを機に中国文学に本格的に携わるようになる。そして支那文学科で現代文学の研究<sup>いくたつぽ</sup>に取り組んだのは、彼ただ一人で、卒業論文に「郁達夫研究」を書き上げた。

この郁達夫は(1896~1945)中国近代的小説

家、散文家、詩人である。浙江省富陽の生まれで、3歳の頃に父親が亡くなり、一家6人は貧しい生活を送った。早くから古典文学に親しみ、杭州育英書院在学中に辛亥革命が勃発したことで、帰郷する。1913年、日本へ渡り、東京第一高等学校予科、名古屋第八高等学校医科、東京帝国大学経済学科で正式な国費留学生として学び、郭沫若はクラスメイトだった。1921年、郭沫若らと共に「創造社」を創設し、1922年、帰国後、「創造季刊」などの雑誌の編集に携わった。八高時代の自分をモデルに異国に学ぶ孤独な青年の性の悶えと弱小民族の悲哀を描いた『沈淪』という問題作を1922年に出版した。その後、北京大学や広州中山大学で教えた。魯迅と出会って影響を受け、1927年、創造社を脱退し、1928年、魯迅と共に月刊誌「奔流」を編集、外国文学の紹介に力を注いだ。その後、武漢で抗日救亡活動に参加、香港、南洋群島一帯でも、抗日愛国宣伝活動に従事するものの、シンガポール陥落ののちスマトラ島へ亡命した。日本語に精通しているため、日本憲兵の通訳をさせられた。しかし多くの華僑を助けたため、後に、日本憲兵によって逮捕され、1945年殺害された。49歳だった。代表作は「沈淪」、『春風沈酔の夜』、『はんはんや范々夜』、『還魂記』などがある。

竹内好がこの作家のどこの部分に興味を持ったかといえば、魯迅の影響を受けて、1927年に「創造社」を辞めるまでの前期の苦悶の時代である。この卒業論文を詳しく紹介したい思いに駆られるが、それはしないで、結語の一部分を引用しておきたい。

郁達夫——彼は苦悶の詩人であった。彼は自己の苦悶を真摯なる態度を以て追求し、大胆な表現の中に曝露することによって中国文壇に異常なる影響を齎した。何故ならば彼の苦悶は同時代の青年の社会的苦悶の集約であったからである。だが、中国社会の進化の急速さは永久に彼の苦悶を今日の苦悶として止めることは出来なかった。時代の転換期に於て彼は新しい苦悶の渦中に飛込むことなく、自己の歩んだ道を固守することによって苦悶から脱却したのである。（「郁達夫研究」『竹内好全集第17巻』筑摩書房1982.9. 160頁）

すなわち竹内好は、この論文の中で郁達夫が過ごした八高時代も含めての苦しみ、単に彼だけに現れたのではなく、若者としての苦しみを時代との関連の中で、作品を通して明示した。それは詩人的な苦しみであった。さらに郁達夫が革命文学を支持しても、革命文学家とはなり得ないことを指摘した。しかし、その課程で郁達夫が自らの小説家としての考え、作法を確立したことを論証している。同じことを竹内好自身にもそれがあったと言えるような気がする。すなわち文学や詩を志す若者は、作品のなかに作者が描き出したどろどろした人間の醜い部分を多く見ているはずである。その反動として、きれいなもの理想的なものを現実の社会、時代と比較しながら、若者は求めがちである。竹内好は「郁達夫研究」を通じて自らの姿を映し出したと言える。

このような論文を書かせ、さらには魯迅の作品の翻訳を始め、中国文学研究者の第一人者となったきっかけと動機はなんであったか。回想録から見えていく。

最初は1954年（昭29）9月9日の毎日新聞に掲載されたものを紹介する。

お前はなぜ中国文学をやるようになったか、という質問を時々うけるが、動機の説明ほど、しにくいものはない。私の場合は、偶然の要素の方が大きい。大学で支那文学科をえらんだのは、いちばんはいりやすかったからで、もともと勉強する気などなかった。当時、支那文学科の学生には、中国旅行の便宜が与えられる制度があった。この制度を利用して、青年期の逃避欲を満足させたことが、結果として私を中国に結びつけたまでである。

私は中国で、生きている人間を見た。それは感動的な出来事であった。私は、この人間の心を知りたいと願った。そこで仲間を語らって、大学でやらない現代文学の研究をはじめた。これが中国文学研究会で、仲間には岡崎俊夫や武田泰淳がいる。中国文学研究会の経営と、雑誌『中国文学』の編集に、私は青春の総エネルギーを注ぎこんだといっている。そしてそのことを私は悔いていない。（「私の著作と思索」『竹内好全集第13巻』筑摩書房1981.9. 279頁）

「いちばんはいりやすかったから」とするのは、無試験だったようである。そして官費の援助で国外旅行まででき、そのことがこの学科で学ぶのではなく、入る動機であったようだ。そして中国に行き、考え方を変えたのである。その選択は彼にとって後悔をもたらすものではなかった。そして引用後半の冒頭の部分には「私は中国で、生きている人間を見た。それは感動的な出来事であった。私は、この人間の心を知りたいと願った。そこで仲間を語らって、大学でやらない現代文学の研究をはじめた。」と、ある。この部分をより詳しく語ったものがある。それを引用する。

私が最初に中国へ行ったのは、一九三二年の夏である。そのとき私はまだ学生だった。籍だけは中国文学科にいていたが、本気で中国文学をやろうという気はなく、中国にたいして関心もなかった。ただ、この旅行には旅費の補助があったので、その制度を利用して青年期特有の放浪癖を満たそうとしただけである。ところが、たまたま行きついた北京で、そこの風物と人間とが私を魅了した。期限がきても私は日本へ帰る気になれなかった。家にせびって追加の旅費を送ってもらって、寒くなるギリギリまで単独旅行者として北京に居残った。そして毎日あてもなく街をほつつき歩いた。私の中国との結びつきは、このときにはじまる。

街を歩いていて本屋にぶつかると、つとめて新刊の文学書をあさり、財布のゆるすかぎり買い込んだ。当時、私の中国文学に関する知識は皆無に近かった。大学では近代以後の文学はあつかっておらず、古い文学は私の方で敬遠した。雑誌などにも、新しい中国文学の紹介は、見るに堪えるものはほとんどどらなかつた。どんな作家がいて、どんなものを書いているのか、皆目わからない。文学研究会と創造社の区別さえ知らなかつた。だから本を買うといっても、こちらに規準があつて選ぶのではない。読まれていそうなもの、代表的作品らしいものを勘で見分けるのである。日本からの留学生は何人か北京に住んでいたが、彼らは古い本のことは知っていても、新しい本で何を読めばいいか、何が読まれているか、そういうことは概して風馬牛だつた。中国人の友人はまだいない。暗中摸索のほかなかつた。

私の目的は、中国人の心をつかみたい、自分なり

に理解したい、一歩でもその中に踏み込んでみたい、ということであつた。行きずりの男たち女たち、朝晩顔をあわせる下宿のボーイたち、彼らが私にとって人間的な魅力を増していけばいくほど、ますます私は彼らとの内的な疎隔が不安になり、もどかしくなつた。たしかに私と彼らの間には共通のルールが働いていることを感じるのだが、そのルールを取り出すことができない。そのルールは文学によってしか取り出せないことを、経験から私は確信していた。だからヤミクモに文学書をあさつたわけだが、哀しいかな予備知識がないので、手ごたえがない。入るべき門が発見できない。そして日がたつていった。

中国文学の知識が皆無だつたと私は書いたが、いま年表をしらべてみると、当時すでに魯迅や胡適の訳は日本で出ており、私もそれを読んでいたはずである。だから皆無というのは正確ではない。ある種の既成概念はあつたはずである。ただそれが、実際の目で見える民衆生活の状態とあまりに大きくかけちがつていたところから、ショックを受けたというべきだろう。白紙ではなく、イメージはあることはあつたのだ。ただ役に立たなかつた。だから最初のイメージはこわすほかなかつたのである。ピラミッドの頂点だけが宙にういていた。その架空のイメージを御破算にして、ピラミッドの底辺からもう一度煉瓦を積みなおさなければならなかつた。ともかく、自分は何も知らないという実感は痛切にあつた。このとき買って帰つた本の中では、張資平の小説がいちばん数が多かつたくらいだから、皆無でないまでも私の知識が貧弱きわまるものだつたことだけは確かである。（『孫文観の問題点』『竹内好全集第5巻』筑摩書房1982.9. 25頁）

手探り状態で北京へ行ったわけである。それというのも大学で学ぶのは古いもの、すなわち漢詩や漢文であり、文人たちの名前というならば、李白や杜甫など昔の人たちばかりであつたわけだ。上の引用文の中で「創造社」を知らないと書いているが、先ほど見た郁達夫の略歴を見たときに出てきたもので、郁達夫と郭沫若が作った出版社である。しかし知らないということは問題とならない。知識として知らなかつただけのことである。竹内好にとって北京の地において、自分の身の回り

には人間が沢山いて、皆それぞれに生活している。その人たちとコミュニケーションができないばかりでなく、その人たちの心がよく分からない。彼らに魅力があるにもかかわらず、である。この「人間的な魅力」とは何か。この引用文の続きを見てもよく分からない。さりとして他の作品を探すわけには時間がなさ過ぎる。仮にこの「魅力」は日本人にないとすればどんなことになるだろうか。一応そのように考えておきたい。なぜならば、竹内好は小説ばかりでなく中国に生涯つきあったのだから。

また、引用では「生きている人間を見た」と書いている。「生きている人間」なら日本にもいたはずである。その日本では見つけることなく中国で見つけた。と言うことは当時の日本人にはなくて、中国人にあったものは何か。もちろん貧富の差は日本にも中国にもあった。しかし明確に「これこれである」とは指摘していない。そしてそれを見つめるのが文学であると見なしている。ただ彼にとって明確になったことは、「自分自身が何も知らない」と言うことだけであった。これが彼に中国を学ぶことに導いたわけである。

そして二度目の中国滞在は、日中全面戦争の発端となった北京郊外で起きた盧溝橋事件のため、予定より三ヶ月遅れた1937年10月27日からである。この滞在は、翌々年の1939年10月15日まで続いた。ただし、この年の初めの2月には東京に戻っている。父親の願いで見合いのために戻ったのであるが、父親が亡くなってしまったため、3月下旬に北京に戻る。そして同じ6月の下旬に、父親の遺骨埋葬と婚約破棄のため一ヶ月ほど日本にいて、7月半ばには北京に戻った。

### 3 魯迅とのこと

竹内好が初めて魯迅のことを書いたのは、1936年(昭11)で、26歳の時である。夏には信州佐久に来ており、魯迅の作品を何点か読み、9月には「魯迅論」に取りかかった。そして10月19日に魯迅が亡くなったことを聞いて、予定していた「魯迅特集号」の「中国文学月報20号」に、急遽、魯迅の書いた「死」を翻訳し、哀悼の意を表して、掲載した。この特集号は偶然であったようだ。

この時の竹内好には魯迅がどのように映ってい

たかを見ていく。

この「魯迅論」では魯迅が死んだことを念頭に置いて書いてはいない。この「魯迅論」の冒頭は次のように始まる。

魯迅の毒舌は大抵のものが怖れている。冷嘲と呼ばれ、一たび筆鋒に触れば骨を刺す寒さを論敵は覚悟しなければならない。(「魯迅論」『竹内好全集第14巻』筑摩書房1981.12. 37頁)

これに続く文章で竹内好は、論敵を厳しい「毒舌」に曝していくうちに文章がうまくなっていくと評している。それを魯迅の「自然のままの冷酷な表情と見るべき」と断言している。魯迅が用いる武器は「諷刺と逆説」で、「網にひっかかってくる獲物」を翻弄させ、「容赦なくとどめを刺す」と言い、「骨の髄までしゃぶる執拗な食い下がり」と、貪婪さを持っている」と、魯迅には残酷さがあるといわんばかりの書き方である。このような魯迅の攻撃の対象は、後期の「創造社」の「思い上がった革命文学ぶり」に対してであった。なぜこんなにも厳しかったのか。

「あの時、自分は、マルクス主義の射撃法を心得たものが現れて自分を狙撃してくれるのを待っていた、しかし、とうとう出て来なかった。」(「対於左翼作家連盟の意見」)

これは左連の成立大会席上での演説である。ポオズはあるが、珍しく弱気な、不測の中に真実を洩したところがないでもない。誰もが結局、マルクス主義を理解していなかったのである。魯迅は勿論——むしろ彼は最後の人であった。大体、あのような辛辣な逆説が生れるということ自体が、激しい自己矛盾の結果としてしか理解の方法がない。他人に向ける刃ならばもっと柔くていい筈である。革命文学を揶揄した時は、自ら革命を理解するために力めていた時であった。創造社にしてもが、余裕あって「奥服赫変」や「増魯迅」を振かざしたのではない。……略……血みどろなのは魯迅だけでなく、創造社だけでなく、無論、段祺瑞に殺された女師大の学生劉和珍(魯迅「紀念劉和珍君」)だけではないのだ。怖るべき俗論は、魯迅を先覚者に仕立てることで、もし魯迅が英雄であるとすれば、正にその反

対の理由こそ、自己を分裂のまま受取る凡庸さの故にこそ、彼は英雄でなければならない。(同)

魯迅が論敵を激しく追求することは、竹内好にしてみれば、魯迅が自分自身に向けた攻撃の言葉と映ったのである。自己の内部にある矛盾を解決するために、論敵に仕掛けて、それに対する逆襲を受けて、自己の内部の弱さを克服しようとしていたと竹内好は指摘する。そのような状態の魯迅を曲解して「先覚者」に仕立ててはならないとも警告している。むしろ、分裂している自分のありのままを受けとめ、それを乗り越えようとしているが故に「英雄」と見なすべきだとしている。

そしてどんな点が矛盾であるかを、作品「狂人日記」と「阿Q正伝」を通じて明らかにする。「狂人日記」は主人公である「おれ」が兄を始めとした村人たちが、「おれ」を喰うのではないかという恐れを、日付のない日記として書いている。この処女作の位置づけを竹内好の文章から見ておく。「筑摩世界文学大系62 魯迅・茅盾」(筑摩書房、1958)に掲載された魯迅を解説した文章である。

この魯迅の沈潜時代は、反動期のインテリゲンツィア全体に共通する精神状況だった。政治上の変革が阻止されたために、彼らのエネルギーは内攻して、新しい制度のなかに温存されている古い価値観の根底をくつがえす運動となって、目に見えぬ破壊力をたくわえていったのである。この内面的変革運動は、主として二つの目標にむかって漸次集中された。その一つは、儒教的倫理観であり、もう一つは伝統の美意識である。どちらも、運動としては清末以来すでに数十年の歴史をもち、しだいに深まっていったものである。1910年代の後半にいたって、それがついに爆発点に達した。そして文学革命、あるいは五・四文化革命とよばれる旧文化の全否定の運動となってあらわれた。この運動の渦中に突如としてあらわれ、文化革命の実質的勝利を自己証明した記念碑が、魯迅の「狂人日記」であった。「狂人日記」は、内容、形式ともにまったく新しい作品であって、あまりに新しいがゆえに、その価値転換の意味がつかめず、同時代のあいだでしばらく批評の対象にならなかったほどである。しかし、若い世代

にはショックを与えた。これ以前にも、西欧の近代小説を模倣した作品がなかったわけではないが、「狂人日記」はそれらとは異質のものであった。中国文学はこの作品の出現によってはじめて創造の主体を確立できたのである。……略……

「狂人日記」は、伝記の項で説明したように、魯迅の事実上の(習作をのぞいて)第一作であるばかりでなく、近代文学としての中国文学の方向を打ち出した最初の作品である。ここで狂人の手記という仮託が設けられているのは、そうせずには内容的にも形式的にも思い切った破壊が行なえないからである。儒教倫理の虚偽を外側から暴露するだけなら、他の同時代者が行なったように、普通の叙事文でも書けるはずだが、その虚偽が自己をもむしばんでいる、自分が被害者であるばかりでなく加害者であるという、徹底した認識以上の行為的立場を打ち出すためには、どうしても主人公を狂人に仕立てるほか方法がなかった。またいっぽう、文語に反対するために口語であれば何でもよいとする当時の新時代の風潮に魯迅は疑いをもっていたので、その批判を寓するうえにも狂人の文体に仮託する必要があった。

(「筑摩世界文学大系62 魯迅・茅盾」筑摩書房、1958。444頁)

この引用の最後の部分でわかるかと思うが、旧来のすべてを打破するのみならず、自己の内部にも巢喰っているものを破壊するのに「狂人」を必要とし、その心情をあらわにするために「日記」としたわけだ。この「日記」の最後の方に「四千年の食人の歴史を持つおれ。はじめはわからなかったが、いまわかった。真実の人間のえがたさ。」とある。この部分で、否定すべきものが自分の内部にあるということが理解できる。

竹内好が書いた「魯迅論」に戻る。

「狂人日記」が迎えられた熱狂ぶりは右の言葉(省略)に尽きている。このことから次の二つのことが言われなければならない。即ち、新文学の最初の作品であった、という意味は、文学者としての自覚をこめた最初の態度であったこと、それにも拘らず、第二に、イデオロギイ的には当時の進歩した智識階級層にいくらか先んじてはいなかったこと。……略……

「狂人日記」は、封建的桎梏に対する呪詛ではあるが、その反抗心理は、本能的、衝動的の憎悪に止り、個人主義的な自由な環境への渴求を明かにしていない。だから、大衆感情の組織者ではあっても、先駆としての意義は甚だ稀薄なものとなる。大体、彼の作品につきまとう東洋風の陰翳は、生活に溶込んだ民間風習に由来するものであろうが、儒教的でないまでも、特に倫理的色彩に於て、気質的に、近代意識の反対者たる百姓根性を多分に脱けきれぬものがある。（『魯迅論』『竹内好全集第14巻』筑摩書房1981.12。40頁）

すなわち「狂人日記」は新しい文学の最初のものであるが、その新しさを支える精神、または考え方は特に突き抜けた先進性はなかった、と言う竹内好の指摘である。その指摘を竹内はさらに敷衍して、引用の最後の部分にあるようなことまで断言する。「特に倫理的色彩に於て、気質的に、近代意識の反対者たる百姓根性を多分に脱けきれぬものがある。」これを意識した魯迅は、自分の内部にある「百姓根性」を何とか払拭したかったという指摘である。このような状態にある魯迅をさらに竹内好は言う。

魯迅が理想家ではないという致命傷を負っている。いい換えれば、魯迅の場合は、設定された目的意識なり、行動の規範なりを持たなかった。気質の上で大差のない周作人が、北欧風の自由思想を取入れて、一種ニュアンスある個人的虚無哲学を作り上げたのに較べると、魯迅の方は、あくまで文学者の生活であり、それだけ観念的思索の訓練を欠いた十八世紀の遺臭を伴っている。一步を先んじたかもしれないが、超ゆべく要請された十歩を、時代から超え得なかった。……略……これが魯迅の宿命的矛盾であり、魯迅に表現された意味で、現代中国文学の矛盾でもある。（同、41頁）

このような魯迅の心の内を、竹内好は、「阿Q正伝」でいっそう明確にしている、と言う。阿Qの存在は諷刺的であるとした上で、阿Qの性格は当時の中国人の誰もが、その全部をあるいは一部を持っているという指摘に同意した上で、「阿Qは魯迅自身の引き裂かれた分身」ではないかと

仮定を提出している。

この仮定は一見、根拠のない妄説のように受取れるかもしれないが、前に書いたように、彼の逆説的筆法、アフォリズム形式が、自己矛盾の表現であるとした見方に立てば、魯迅が阿Qの中に自己の戯画を眺めるということが、そう不自然でない妥当性を持ち来すと思う。ここでは、阿Q的存在は当然、魯迅の批判の対象になっているのだが、阿Qも亦、自然主義作家魯迅（たとえば「祝福」）の批判者として登場しているのである。「阿Q」のテーマが、革命は成功した、しかし革命は成功しなかった、という点にあることを注目しなければならない。「狂人日記」では、否定的情熱として作家の生命を燃やした矛盾が、ここでは、政治とイデオロギイの乖離という歴史的事実を借りて自己批判をやっているのである。だから、この人間的成長——歴史に伴って曝露されてゆく自己矛盾——の反面には、作家としての燃焼が終焉に近づくという悲劇が隠されているのかもしれない。事実、これから魯迅の「彷徨」が始っている。これが悲劇なら、現代の中国文学全体が悲劇であるとも言えるのである。（同、42頁）

とにかく魯迅は、「阿Q正伝」の中に自分を含めて否定すべき中国を描き出したのだ。このことを知った竹内好は、魯迅を必ずしも先進的な革命的な作家とは捉えてはいない。魯迅が描き出す世界は、魯迅自身を含めて中国文学の置かれた現状をあらわしているという指摘である。そして魯迅は「文学の優位性を信じていない」ことを指摘し、体験から若者たちに「西欧の近代精神に触れること」を勧め、「文学を政治主義的偏向から守る」としている。

#### 4 毛沢東への視線

竹内好が初めて毛沢東について書き、発表したものと思われるものが『魯迅と毛沢東』である。これは1947年（昭和22）9月に発行された「新日本文学」（新日本文学会刊）に掲載された。そしてほぼ四年後の1951年（昭和26）4月号の「中央公論」に「評伝毛沢東」を發表した。この後者の評伝の中で描き出された毛沢東を見る。

この評伝の組み立ては「1 出生」「2 時代区分



と英雄崇拜の儀礼」「3家からの脱出」「4郷土文化」「5学習態度について」「6旅行・結婚・鍛錬」「7無からの創造」「8自己改造の問題」という見出しになっており、それらの見出しにしたがって書かれている。時に応じてジャーナリストのエドガー・斯诺の書いたものを証言として用い、おおむね肯定的、好意的にそして客観的に書かれている。

少年時代の行動から毛沢東の特徴を述べている部分を最初に引用する。

毛沢東の少年時代の行動と、そこにあらわれている意識の特徴的性格を、もし強いて階級的に分析するならば、おそらく非常に中農的といえるのではないかと思う。もしかかれが貧農（あるいは小作農）の子なら、いかに知識欲が旺盛でも、学生生活にあこがれるはずはなかった。家からの脱出は、せいぜい父親と同様、兵士にでも応募するしか実現方法がないわけだ。学問へのあこがれそのものが中農的地盤に属している。すでに科挙の時代は去っていたが、学生はやはり士大夫（官僚）候補者と同一視される社会的地位を保っていた。そして科挙に応じうる最低身分が中農だった。少年毛沢東をとらえていた未来の夢は、立身出世というより、一種の経世家的な理想であったと思われるが、その理想の実現のためには野良仕事は不向きで、学問という余裕ある通路を経なければならず、それには直接の労働から自分を解放する必要がある。この場合、学問が有利な立身出世の道だという科挙以来の伝統の功利主義が父親にあったと想像される。はじめ毛沢東を湘潭の米屋に奉公させるつもりだった父親は、息子の熱心な説得に負けて、湘郷に出来た新式の学校へ入学させることに結局は同意した。これが毛沢東の十六歳の年で、かれはこうして家からの脱出に成功した。

（「評伝 毛沢東」『竹内好全集第五巻』筑摩書房、1981.4. 273頁）

そして毛沢東に影響を与えた三つの事件を紹介しており、それらはいずれも農民の暴動である。しかし竹内好は決定的なものではないと否定し、この当時は多くの若者と同様に外国の侵略に反発する「憂国」の若者の一人であったことを指摘する。1911年の辛亥革命の中心的人物は孫文であ

る。その時、毛沢東は19歳で、魯迅は31歳であった。いくつかの学校を転校してきた毛沢東は、最後の師範学校を卒業するのであるが、竹内好は、毛沢東がその師範学校へ入学する前に半年ほどの行動を報告している。それは省立図書館での読書で、「あらゆる種類の書物を思う存分に読み、健康な知識欲を満たした」と書いている。そして毛沢東の習慣となった新聞を丹念に読むことも付け加えて、それらすべてが毛沢東に大きな効果があったと竹内好は断言する。

なぜ効果を挙げえたか。私は、中国の革命という主体的目標を堅持して放さなかったからだと思う。辛亥革命までのかれは、前に書いたように、素朴な愛国青年だった。この世代のすべての青年と同様、かれもまた滅亡に瀕した祖国の危機を救いたいという念願から出発した。腐敗した官僚絶対権力を倒すことによって国民的統一と対外独立を実現できるものと信じた。しかし、辛亥革命は、名目的な共和制をもたらしただけで、実質的にはかえって分裂と侵略の危機を深めた。単純なナショナリズムだけでは如何ともしがたいこと、なんらかの内部変革が必要なことに、かれもまた気づいた。生きる道を発見しなければならぬ。この死活の観点からかれは一切の事象を見、この観点に向って一切を集中し、調整した。世界は自己との関係で問題になるので、それ以外の思弁はかれには用がなかった。すでにある種の社会思想が、このころかれに芽生えている。社会主義というコトバ（当時は社会改良主義の意味で使われたのだが）も新聞によって学んでいる。かれの内部で形成されつつある「何をなすべきか」が、現象界の混沌をおのずから秩序立て、集約的な世界像をかれを中心として描いていったのである。（同、288頁）

つまり、愛国心やナショナリズムだけでは革命は成功しない。「何らかの内部変革が必要」、そして「生きる道を発見しなければならぬ」と、竹内好は毛沢東が見なしたことを代弁している。この部分の証拠となるような文章が提示されていないので、探してみたい気が起きる。引用文の中に「この死活の観点からかれは一切の事象を見、この観点に向って一切を集中し、調整した」とある

が、整風運動や文化革命に対する理解を、竹内好はこのような毛沢東の考えを基にしていると思える。しかしこのような私の考えは、より竹内好の思索をたどることできつがえるかもしれない。

とにかく、このように毛沢東の進むべき道を定めた後、毛沢東の基本思想に言及する。

純粹毛沢東とは何か。それは、敵は強大であって我は弱小であるという認識と、しかも我は不敗であるという確信の矛盾の組合せから成る。これこそ、毛沢東思想の根本であり、原動力であって、かつ、今日の中共の一切の理論と実践の源をなすものである。それは半封建、半植民地の中国の現実の革命の中から引き出されたもっとも高い、もっとも包括的な原理であり、したがって普遍的真理である。それは物心両面の一切の事象と、個人から国家に至る一切の関係を規定する根本法則であって、実践による内容づけによってそれ自体が生成発展する。

「中国革命の敵は、非常に強大である。」したがって「中国の革命勢力がまたたくうちに組織され、中国の革命闘争がたちまちのうちに勝利しようと考える見方は正しくない」（『中国革命と中国共産党』）。

これまでの革命の失敗の原因は、この認識をもたなかったことにあった。意識的にせよ無意識的にせよ、敵の力を小さく評価しようとして、主観内部に幻影をこしらえた。そこから猪突主義がうまれた。猪突に失敗すると、現実認識の誤りに気づかずに、逆に不敗の信念に動揺を来たして、そこから敗北主義がうまれた。（同、304頁）

言い換えれば、敵は強くて大きい、しかし俺は絶対に勝つ、という思いである。決して敵を侮らさず、正確に把握する、という現実認識が重要であると言うことになる。この考え方は何も革命に限らない。人が生きていくに当たって当然のことである。

さて、毛沢東に関することがらは、このくらいにしておいて、先ほど言った『魯迅と毛沢東』を中心にみる。竹内好が何故このような標題で書いたのか興味もあるし、魯迅は毛沢東より12歳ほど年齢が上であり、この二人は会っていないはずだから。

この『魯迅と毛沢東』では、毛沢東の文学に対

する理解が、毛沢東をして魯迅を高く評価させている、と竹内好が見なす内容である。その論理の展開を追ってみる。中心的なテーマは「文学と政治」で、毛沢東が魯迅を利用しているという考えを、竹内好の文学理解と政治に対する考えをもって論じながら否定している。文学に対する理解度が深い毛沢東が、いわゆる革命作家ではない魯迅を高く評価し、魯迅に共通点を見いだしているという指摘である。次の引用が、その『魯迅と毛沢東』という文章の初めの部分である。

日本の文学の観点から毛沢東を眺める眺め方に、二通りあるように思う。（もちろん、無関心なものも論外だ。）ひとつは、毛沢東の文学論を正しいものとして、環境の隔りからくる個々の当てはめ方のちがいはあるにしても、全体としては、その精神および方法を含めて、全的にそれを学ぼうとするもの。ひとつは、さまざまな理由からそれを拒否するもの。そのさまざまな理由のなかで、いちばん根本になっているのは、毛沢東の文学論は政治主義の偏向である、あるいは、毛沢東の文学論の解釈がそうである、あるいは、少くも今日の日本文学の問題としてはそうである、という見方かららしい。そして、この対立する見方の生れる根本は、毛沢東の文学論の集中的表現である「文学は政治に従属する」という一句にあるらしい。そして、この一句の解釈が人によって異なることと絡みあって、毛沢東の魯迅への評価が問題にされるようである。つまり、毛沢東は政治的に魯迅を利用しているのではないか、毛沢東の魯迅への傾倒が政治的意図から出たものでないにしても、少くも彼の文学論、あるいは文化政策のなかでは政治的に利用されているのではないか、それは毛沢東が偉大な政治家であることを立証するけれども、文学の内部の問題としては、それはまちがいでないか、政治的な解釈を文学の内部へ持ち込むことは、あるいは文学の問題を政治的に組立てることは、文学における無制約な人間の発展を息づまらせ、文学の近代化を害うことにならないか、というさまざまな疑念があるように思う。（『魯迅と毛沢東』『竹内好全集第五巻』筑摩書房、1981.4。251頁）

この部分が問題提起の部分である。毛沢東の

「文学は政治に従属する」と言う言葉の理解をめぐっての波紋から生じたものである。すなわち毛沢東の文学理論を受け入れるか、あるいは拒否するかという問題提起である。この後、竹内好はこの「文学は政治に従属する」と言う言葉の理解を示す。

毛沢東の文学論は、毛沢東という人の立場を考えれば、正しいと私は思う。「文学が政治に従属する」という言葉は、文学の外に政治があって、政治が文学に命令する、という意味であろうか。毛の文章（「現段階における中国文芸の方向」）をよく読めば、そうでないことがわかる。「文学が政治に従属する」とは、文学が具体的な歴史的世界の所産であること、自我実現として無限に個を越えてゆく文学の営みが、それ自体として歴史的、社会的に制約されていること、しかもその制約を突き破るところに文学は文学となること、その文学を成り立たせる包括的な場所として政治があるという意味で、文学は政治に従属するのだと私は思う。（同、252頁）

別な言い方をしてみる。文学はその時代を反映すると言うことである。すなわち小説家や詩人は、いつの時代にもいるが、それぞれ人間として一定の時代に生きている個人である。その彼らの発想は、その時代の思想、習慣、知的な蓄積物が源となっている。それらが「制約」であるわけだ。にもかかわらず普遍的なありようを示す人間が描かれれば、その時代の「制約」を突き抜ける。例を挙げれば、紫式部の「源氏物語」やギリシアのホメーロスが書いた「オデッセウス」などを初めとして時代を超え、国境を越えた作品が存在する。そのような作品を生み出す土壌が政治によって作られる、と理解してよいだろう。このような理解にそっている毛沢東は文学をつぶすどころか、伸びるように手をさしのべていると、竹内好には見え、「彼はあくまでも文学的である。」とさえ言う。

そのように捉えながらも、竹内好は気になる部分を指摘する。

しかし、その毛沢東の文学論のなかで、私が不審に思った条がある。「文芸批評には二つの標準（この

言葉は原語であろう。日本語に訳せば規準に当ると思う）があって、一つは政治的標準であり、もう一つは芸術的標準である。」「……すべて政治標準をもって第一位に置き、芸術標準をもって第二位に置く……」というところである。……略……こここのところは、前後をよく見て判断する必要がある。

前後の文脈から判断し、また、その論が吐かれた時と場所とを考えあわせてみれば、それは、全き存在としてある芸術を意識の内部で分裂させる主観主義でもなければ、芸術以外のものを芸術へ持ち込む政治的偏向でもないことがわかる。彼は実に、敵から文学を守るために、文学の純粋さをかばうために、その論を吐いているのだ。当時、中共は、外からの侵略と、内からの官僚独裁の危険という、内外二面の敵にたいして戦っていた。戦争は、あらゆるものを政治的にする。侵略者は、侵略のために芸術を利用するし、それに抵抗せぬ芸術は、抵抗せぬことによって侵略に利用される。それは私たちの骨身にしみたまわぬ。毛沢東が名を挙げている二人の文学者、周作人と張資平とは、政治一般を拒否したがために敵の政治に奉仕したのではないか。毛は、文学が文学として伸びてゆくために敵と戦わなければならぬこと、戦うことによって、よりよく伸びるための根張りが強くなることを、文学の立場から、文学擁護の立場から、論じているのだと私は思う。（同、253頁）

これも毛沢東の言葉の理解である。中ほどにある「全き存在としてある芸術」とは、優れた芸術作品が、それ自身の持つ独特な世界を指している。そこには他のどんなものも入り込む余地がないのだ。これを二つの基準、すなわち政治と芸術の基準をもって判定するという主観的な考えではないと言っているわけだ。そして政治基準を第一位に置くと言うことは政治的に判断すると言うことではない。むしろ文学が利用されてはならぬために、政治に関心を持たねばならず、すなわち防御の姿勢を保ちながら芸術的な作品を創造することだ。ただし、ここに私の考えを付け加えておきたい。その芸術的な作品が「人間を賛美し、生きる勇気を与え、人間の真実を描き出したもの」であること、ここに文学の本質があると思う。

そして竹内好は、毛沢東の文学理解に、魯迅と

の接点を見出した。

毛沢東の魯迅への傾倒の深さは、なみなならぬもので、しかも彼は、実に文学的に魯迅を見ている。毛の人間形成の根柢に、魯迅が重要な要素に加わっていたらうという気がする。魯迅が「狂人日記」を発表したとき、毛は北京図書館の助手をしていた。「狂人日記」の発表されたより少し前の同じ『新青年』に、匿名の寄稿をしたこともある。彼の魯迅にたいする尊敬は、魯迅の文学生涯の開始と同時に始まり、継続し、高まり、事ごとに彼はそこから励ましと教訓を汲み取っていたようである。……略……魯迅は前進した。そして毛沢東も前進した。文学に無限の高まりを要求した魯迅は、一度も現状に満足したことがなかった。彼は一度も休息しなかった。……略……毛もまた、彼の理想のために現状を破壊しつづけた。今もしているらしい。恐いほど現実主義的な理想主義者という点で、この二人は共通である。魯迅が死んだとき、多くの青年が泣いたが、もっとも心から泣いた一人は、毛であつたらうと思う。

毛沢東は、魯迅を追憶した彼の講演の中で、三つの点を指摘して高く評価している。第一は政治的遠見、第二は闘争精神、第三は犠牲的精神。これは正しいと私は思う。このような簡潔な言葉で正確に魯迅を評価することは、よほど深く魯迅を見つめ、文学の味を噛みしめ、その断言を肉体の底から湧き上らせるだけの豊富な生活体験を持った人でなければむずかしいことを、私自身が魯迅研究者の一人として、とくに切実に感じる。毛は、魯迅を「中国第一等の聖人」とまで呼んでいる。そして「共産党の組織内の人ではないが、その思想、行動、著作はすべてマルクス主義化されている」と評している。その魯迅は一度も自分がマルクス主義者だと宣言したことはないのだが。(同、254頁)

では、竹内好は毛沢東と魯迅の接点が、どのような内容であったかを見る。

魯迅は、文学に限りなく高いものを求めた。そしてそれへ向って一步一步努力をつづけた。進歩を妨げるものは、何者をも許さなかった。彼は、敵を許さなかったばかりでなく、味方をも許さなかった。

また、自分をも許さなかった。彼に甘やかされぬことを不満に感じた青年の多くが、彼にそむいたほどである。しかし彼は、青年に苛酷なものを要求はしなかった。彼は「ただ一步を」、しかし「限りない一步を」求めただけだ。……略……「真実さえあればいい。ほかに何もいらぬ」とも彼はいった。彼は「表紙に騎馬の英雄を描いた」革命文学の雑誌を憎み、「拳固を頭より大きく描く」プロレタリア画家を憎んだ。

すべてそれらを、毛沢東は知り、そのすべてに尊敬を捧げた、と私は思う。毛もまた、看板を信用せぬことに確信を持つ人だ。そして「真実だけで十分」な人だ。だからこそ、彼は人間的に魯迅を見、魯迅の苦闘に感動し、『資本論』をよめ魯迅を「マルクス主義的」と評しえたのだろう。「私は古い人間だ」と魯迅はいった。「だから古い社会の悪いところをよく知っている」と。彼は身をもって古い社会を滅ぼそうとした。「憎むもののために生きる」という彼の思想が、そこから生れた。そのことを、毛沢東は見抜いているらしい。魯迅は、個を否定することによって、個を越え、階級を越え、歴史を越えた。それを毛は、彼自身の切実な体験によって知っている。……略……文学を深く愛した毛は、文学の現状に満足せず、より高いものを、より厳しいものを、彼ら(丁玲や蕭軍)に求めた。「魯迅を見よ」と彼はいった。それは「人民を見よ」というのと同義語である。魯迅は政治を越えた。文学は政治を越えるべきものである。越えるべきものとして政治を「知らねばならぬ」。知ることは自由になることである。(同、255頁)

この引用の最後の部分はわかりにくいかもしれない。すでに知られているように、魯迅は仙台で人間の肉体を治す医者になることをやめ、中国社会を直すことを決意した。しかし政治体制など社会の仕組みを直すことではなかった。革命によって政治体制を変えることは可能であっても、それを支える人々の心が病んでいては、その体制を維持することは不可能である。だからこの引用文にある「個」とは、『阿Q正伝』の主人公である「阿Q」であり、すなわち自らを含めた中国人一般である。この同じことを毛沢東は革命運動の中で見知っていたのだ。それ故に「文学」が人々の

心の病を治すと信じ、魯迅を讃え、高く評価したのである。もちろん今言った「心の病」とは、本当の病気のことではなく、長年中国人に染みついている、悪習はもちろんのこと、そして悪しき考えから始まってあらゆる否定すべきものを棄てなければならぬ。それをしなければ「より良くなる」と言うことになる。そして、さらに竹内好は、二人を次の引用のように捉える。

魯迅は徹底して偶像を排斥した。主人持ちとなること、ドレイとなることから、身もだえして逃れようとした。文学者にとって、偶像とは言葉である。彼は言葉の支配から自由になるために苦闘した。毛もまた、徹底して偶像を排斥した。政治家の偶像は「思想」である。彼は思想に身をまかせずに、それを越えるためにそれと戦った。実に徹底して彼らは自由人であった。自由人としての自己を打ち出してゆく過程がそのまま民族の歴史になったような人たちである。(同、258頁)

このような理解を竹内好が進めていき、最後の部分で鮮やかに断罪する。当時の日本共産党員である野坂参三が「延安における民衆芸術」という講演で「政治が第一で芸術が第二であり、したがって芸術は政治にしたがふべきである」と言っ

たことを批判する。すなわち、毛沢東が「文学は政治に従属する」といった意味を曲解したと。そして中野重治のことは「文学者は、日本人の人間としての成長にどんな制限をも決して与えてはならぬ」(「日本文学の諸問題」)を使いながら、党がこのような、すなわち「政治に従うべき」としてはならない、と締めくくっている。

言葉とは、本質的にはコミュニケーションの手段である。文学はこれを用いて表現される。より正確に言うならば、文学作品は、作者の主観に基づいて作られた世界である。言葉についてもう一步踏み込んで考えてみると、その役割をもう少し分類できる。われわれ人間がものごとを認識するための手段でもあり、ものごとを抽象的であれ、具体的であれ、創造するために考えるための手段でもある。竹内好の言う、「言葉の支配」とはコミュニケーションとものごとの認識に重点を置くことになると思える。ものごとを創造するために考えることが、人間の心の病を治すのに役立つと思えるからだ。つまりこのことがさまざまな因習にとらわれない「自由」を意味することになる。

(本論は、長野県日中學術交流委員会主催の第10期「日本と中国を考える連続市民講座」(2007年4月21日)において「竹内好と中国」という演題で講義されたものである。)